

猫にもサプリ

今迄は深夜帯であったものがゴールデンタイムにまでCMが入ってきている番組の数をカウントしたくなりそうなほど多いサプリメント。一体このサプリ市場はどれほどの売上げ規模か興味深い。効き目が本物で医療費減になり保険行政の手助けになっているのなら歓迎したくなりそうな気持ちになる。

そういう私も栄養補助食品サプリの世話になっている。蜜蜂抽出ローヤルゼリーとプロポリスである。それを大病以来五年間愛飲して、爾後今日まで風邪一つ引かないのはこのお陰だと強く信じている。これに出会うについては三つのご縁があった。この大沼養蜂さんは岳父の油絵の師であった示現会の大沼静厳さんの身寄りのお家なのである。岳父はその地、加戸小学校の校長でもあったので親しみ深い。また東京芸大出でエリツェン訪日ときのホテルインテリアなど手がけた友人同級の酒井平二郎君とも姻戚であることが判明。その上私がNPOを立ち上げた原点の高須里山の雑木林に大沼さんが巣箱を置いて「からす山椒」などの蜂蜜を採取をされていることである。この三つのご縁もあつての愛用であるが、つい人様にお勧めしたくなる。

知合いの夫人の家庭では愛猫にもサプリを飲ませているとか。飲み忘れると黄色くなるはずのおしっこが透明になりご家族に飲み忘れを指摘されるのだとか。

とぼもち厚切りがいい

餅が好きである。福井で菓子司を営む同級友人から帰郷の度に越前福井の白い丸餅を貰い重宝している。一昔前には家でも所謂餅つき機を駆使して家内と二人でよく餅を作った。春は野に出て蓬を摘み茹でて草餅を作った。季節感に溢れ、仏壇にも供えた。勿論正月用は鏡餅から丸小餅それに「豆とぼ餅」などなど作り都会のはらから達に通っていた。鏡餅など家内は大小の井を上手く使いこなして器用に作りなかなかのアイデアマンだった。

ところでこの豆餅などを普通「とぼ餅」と言う。この「とぼ」の語源が昔から気になっていて当時色々の辞典、事典、言海などで探したことがある。そして度量衡に関する関係があるということに辿り着くまでかなりの期間を必要とした。

呉服店を商っていて着物仕立ての寸法はいわゆる鯨尺である。鯨寸二尺が七十五センチで換算が難しい。この鯨の物指しは昔は鯨の髭の乾燥したもだった。

大工の物指しは曲尺で一尺三十三センチである。さて問題の「とぼ」は斗枘の上を横に払う棒のことである。即ち斗棒で正確に計量するための補助棒である。その太い形状と似ているから餅の切る前の形で斗棒餅と言うようになった。それにしても市販のとぼ豆餅はやけに薄くこれではかき餅の親分みたいで悲しい。

江戸小唄のこと

栄子が病を発症してから、娘時代に習っていた三味線を脳の活性の為もあり習うことにして家に個人教授に来て貰い、知り合いを誘い教室を開いてもらうことにした。初心者ばかりなので気楽に始められた。

古い破れ三味線も皮を張替え、また新しい三味線も買い求めた。上京とともにその三味線も持ってきたが栄子がこれを手にすることは今のところ出来てない。その栄子の暮らすようになった施設に都々逸や端唄を呻るご老人の入居者か居られるので、都々逸の合い三味線でも弾けたらと思いい師匠の門を敲いたが、手にあまり簡単に諦め、江戸小唄に切り替えた。ストレス解消にもってこいと思えたからだ。

これを伝え聞いた三鷹の母より父が昔に習っていたころ愛用したと思われる江戸小唄千種縮小版を墓参の折に貰った。その本には父の手による沢山の書き込みや上げ下げ符牒があり父の息吹が感じられた。

この小型の唄本を手にして、父の手の入っている曲を習うと昔日の俳句を始めたときと同様、何となく親孝行している気分になれるのが嬉しい。

栄子の三味線に導かれ父の小唄に出会えたのだ。あまり聞かされてない父の日常の一片がそこに在り遅まきながら父恋いの気持ちで小唄に励むのである。

追記 後日三鷹の母より象牙の三味線撥を頂いた。さあ どうしよう。

人生成り行き

上京してから六年、毎年正月には書初めの真似事をしている。狭いマンションでの一人住まいで正月らしい事はなんにもしていない。田舎では門松作り、仏壇や神棚の世話、床飾りや屠蘇、賀状盆、鏡餅作り、蕎麦打ちなどなど広い家の中をうろろしたものだ。何かそんな正月らしい行事をと思いきはじめた。去年までの題は『心高かれ』。これは母校の校歌の一節、三好達治の詩による。達治は三国に住んだこともあり、好きな詩人である。何よりもささやかな自尊心の矜持と自戒を込めて書き続けてきた。栄子の部屋、マンションに貼り心の抛りどころにしていた。だが去年多くの同年輩の俳優達が逝き、そして生き様に多少の共感を持ち、落語を愛する私としては立川談志にも逝かれて、その上に東北の津波禍とあってはモットーを変えざるを得ない。談志が揮毫でよく書いていた『人生成り行き』を書初めの題に選んだ。談志の芝浜は栄子と金沢そして大阪の独演会で聞いたので思い出が深い。力む事無く穏やかに、流れに棹差さず残された二人の時間を過ごしたい。栄子の中にまだ不安な感情が残っているのなら傍に居て解きほぐしてやりたい。これからも心高かれも忘れず人生成り行きで生きてゆきたいと思う。

皮の手袋

毎年の事だが東京の冬は空気が乾燥して皮膚がトラブルに晒される。除湿器の福井とは間逆で加湿器が必要品である。大した水仕事もしないのに指がひび割れて痛い。寒風の日の外出には手袋が必需品である。今、手元にある皮の手袋は金津から持ってきたものである。もう五十年も昔に栄子の母上から賜った物である。今頃になって恥ずかしいがこれをはめると、その母上の心の温もりを感じてつい昔に思いを馳せること再三である。父上は純粹と云うか素朴な人柄で独特の親しみがあつたが、母上のきめ細かい栄子や私たちへの心遣い、愛情には今思い出しても胸が熱くなる。二人で頑張っていた呉服の店を差し入れなどで訪ねてこられての帰途、店の前を通るバスの中から、心を残してこちらをみておられた姿が鮮明に思い出される。晩年同居していただいた時に「お母さん、お母さん」と呼んで差し上げたら、当然のことなのに痛く喜んで下さったものほのぼのとした思い出である。親孝行したい時分に・・・の心境である。

皮手袋も眼鏡を掛けて見ると傷だらけの品ではあるが、皮手入れ用のクリームを買ってきて自分の体同様に大事に使わなければとしみじみ思う。

幸せの時間

最近一番に幸せに感じる時間は、栄子のベット脇で過ごす毎日昼食前の三時間である。談話室の食事介助を受けてから歯磨きの為に自室に戻り、次の昼食までの部屋での二人きりでの三時間が僕に栄子とともに生きている至福さを実感させてくれる刻なのだ。ベットでまどろむ栄子の腕の下に手を差し込むと体温が栄子の着ているユニクロのフリースから僕と同じユニクロのフリースに伝わってくる。体温で何て素晴らしいと思う。生きていてくれて有難うとつくづく思う。エクセロンパッチを使い始めてから三ヶ月、眼に表情が出たように感じられる。寢息、微かな鼾をたてながら穏やかに眠る様子からは栄子が病気であることを忘れさせてくれる。こんな時間が毎日あるのならこのベット脇で何年でも過ごせそうな気さえする。眼を開けたときに一方的に語りかける。栄子さん、丸岡の新町小町だねと言うと微かに頷く。耳は聞こえているのだ。栄子さんいつまでも大好きだよと毎日耳元でささやくのも日課のひとつである。ごく稀にハイと返事をしてくれると愛しさがこみ上げてきてつい涙する。僕の心に平安を与えてくれる栄子よ、有難う、お互い精一杯生きようね。

懐かしの呉服アラカルト

代々の家業であった呉服店を時代の流れ、それに栄子の介護もあつたとはいえ閉じてしまつて忸怩たるものがあるがご先祖許し給え。でも今も夢で商いをしているシーンをみることもある。雀百までである。明治中期の店の棚卸し大福帳がある。往時は業種は太物商とある。昭和二十七年高校卒業してすぐ家業に従事した。爾来六十年、今もつて忘れられない品々を書き連ねたくなつた。それと同時にそれに関わつた問屋の人たちも懐かしく思い出される。

文庫入着物綿更紗・西陣御召・西陣名古屋帯・西陣袋帯・シルエツトウール御召・越中緋・伊予緋・伊勢崎銘仙・秩父夜具地・本染中形・リップル服地・ヘレンヒギンス白レース服地・英ネル・綿ネル・マジヨリカ御召・十日町黒絵羽織・半反茶羽織・サマーウール・塩沢御召・米沢袴地・秩父丹前地・本モスリン着尺・白山紬・寿光縫取白生地・すわとう刺繍帯着物・色無地着尺・加賀友禅黒留袖・長嶋袋帯・アンサンブルウール御召・奄美大島・伊豆蔵名古屋帯・しょうざんウール御召・御召モスリン・黄八丈・久米島紬・琉球紬・西陣染着尺・雨コート地・紺木綿・田圃帯・天竺木綿・晒木綿・らくだシヨール・ピロードシヨール・防寒コート・ママコート・二丈友禅・深泥染喪服地・黒共帯・襦袢地・きぬたや絞り着尺・結城紬・花見シヨール・鳴海絞浴衣地・貝紫染め着物帯・金巾・布団更紗・宮参り男女初着・和装細貨などなど

古い支度考

田舎に始末出来てない建物が三棟あり頭が痛い。壊すにしても中に何がしかの荷物もあり一人では取捨選択もままならず、ついつい今日まで来てしまった。早く身軽にしておきたいのだが、そして書き置く大事さも分かつているつもりだが二重生活なのでままならない事が多い。コイン・切手買いますの新聞チラシを見る度、田舎の本棚にある切手やテレホンカードが気になるが次世代で何とかするだろう。ただ米新の名前をどう残すのか。事は娘や孫の将来の去就動向もありやきもきしても始まらない。家名を継ぐために父の実家を継いだのだからご先祖もさぞややきもきしている事だろう。この無明とも云うべき十年間が計画を狂わせたのだがこれは致し方ない。大筋は成り行きに任せよう。よく親の遺産争いの話を聞く。それもまだ親が生きているのに、いやだからこそ世話の真似事をして点数を稼ぐ話も聞く。にがにがしい限りである。彼岸に自分が行つたときに檀那寺のゴタゴタで無事ご先祖にあえるかどうかも気になる。自分や家内がどんな形で旅立てるのかがしかとしないときに古い支度などど力んでみても仕方がないがでも何となく心の落ち着かない毎日ではある。

キープスマイル

友人S君の年賀状の添え書きにキープスマイルの言葉があった。娘が最近のお父さんは笑顔が無く不機嫌そうで孫達が怖がると言う。二十年も前に同級生の高木荒熊君がこめしん君はいつもニコニコしているなあと感心したように言ったのを覚えている。あの頃の私が今の私を見るときつと嘆くだろうと思うとつい目頭が熱くなる。中学生の時の国語教科者の一節だったか、唇に歌を、心に太陽をとというのがあり忘れずにモットーにしていた。結婚後家内は何時も笑顔で客対応をしてくれ、客の仕立物の遅れの苦情にも笑い顔で断りを言っ皮肉を言われたりしていた。人を誇ることはない家内の笑顔が好きだった。私もその昔に落語や声帯模写の真似事をして前座みたいな縞の着物も作ったりした。先々代古今亭今輔や春風亭柳橋の声色は今でも出来るが肝心の本人を知る人がいなくなった。近年一度だけ柳家金語楼の顔面模写をしてスナックママの笑いを取ったがそんなこんなの気分はすっかり失せて不機嫌面の爺さんが鏡の向こう側に居て、慌てて下唇をひっこめて見たりしている。泣き笑いの一人居は生き方下手になりつつある。せめて口角を上げることから努力しなくてはと思う。

雪の日の葬送

雪降りしきる金沢へ従兄の省吾兄の葬儀に行った。丁度十歳年上で最後の従兄である。私が金津に貰われて来たのが五歳、小学校に上がり桜井伯母の家に行くとき髪ぼうぼうの四高受験浪人中の彼が居た。たまたま夏休み宿題の絵日記に福ちゃん漫画風に全部描かれてしまい戸惑ったのが最初の出会いだった。その後、町の草野球チームのキャッチャーとして活躍。あだ名は顎が出ていたのでペリカン。隣町での試合に友達と応援に行ったものだ。今でも当時のチームラインナップを語っているが全て故人となられた。労働省の役人になり最初は三鷹に住んだ。家捜しなど私の父と省一兄とで探し歩き当時二十八万円で一軒家を買ったとか聞いている。役所持参の弁当などでの噴飯もののエピソードなどあり意外な人物像が見えて面白い。金沢で役人生活を終えてからその地に落ち着き、私たちが金津を去り上京するまでは毎年お盆になると二人の叔父の仏壇に欠かさず参りに我が家に見えて、勢いのいい警咳を聞いたものだ。夫婦での旅を随分楽しんだようでもめに旅行記など書いていたと聞いている。三年位前から軽い認知症の病状がでて心配していたのだが昨年秋季よりこれに癌も加わり、でも延命処置を選ばず好きなクラシック音楽の自分コレクションを聴きながら穏やかに逝かれたとか。本人もさぞや本望であつたらうと思ひもつて冥福。享年八十六、省一兄四十九 民子姉二十六、淋しい春彼岸である

ぶらりひょうたん

私のハンドルネームである。今、小唄を習っていて先日から「乙に絡んだ」の曲になった。「乙に絡んだ垣根のへちま　ぶらりと下がったン程のよーさかねかね」　戦後二十年代に活躍した文人の政治社会評論家、今様に言うならコラムニストである。評判の鋭くそして洒脱な文体の社会コラムの書き手であった。これも高名な広津和郎氏はこれ読みたさに東京日日新聞を二部取った。当時は紙事情も印刷事情も悪く一部では印刷かすれなどで読めないところがあるからだと書評に書いている。その単行本を何冊も中高生の私はよく読んだ。いまではアマゾンなどで稀こう本扱いである。「ぶらりひょうたん」3部作やその他、「いろは歌留多」などの本もまだ手元にある。随分手ずれてしまいい売り物にはなりそうもないが捨てがたく欲しい図書館でもあれば寄付したい。

私のネットなどへの投稿ネームはこの表題を拝借して「ぶらり」を「ぶらり」にして使わせて貰っている。出典がこれだから高田氏に恥じないよう書いている積もりである。随分以前、新聞社T君の好意でその新聞のコラムをしばらく書いたり、仲間の週報にコラムを連載したりしたが、鉄面皮で書けたのもブラリを読み込んだお陰かもしれない。高田保氏昭和二十八年没、瓢箪のような風貌の人であった。

梨の花

梨の花は言うまでもなく中野重治の代表作の一つである。後年NHKラジオ私の本棚で宇野重吉が一ヶ月に涉りこれを読み話題になった。毎日ラジオの前に陣取り録音ダビングして知り合いに配った。現在梨の花文学会で読み継ぎ背景などについて不定期ながら集まりがあり話し合いがもたれている。私が重治の小説を読み始めたのは高一であった。むらぎもなどは難解で何とか読み解こうとしたがこの頭では無理であった。その後単行本も随分買った。萩のもんかきやなど平易なものもあり読後感を著者に送ったのかと思うがそれを忘れていた。後年結婚してから中野さんから葉書が舞い込んだ。それにはこう書いてあった。『一昨年(多分)末あなたから手紙をもらいそれを見失って今日にいたり今回調べものをしていて見つけました。当時返事をそのうちさし上げようと思つてそのままになったものと覚えます。今もそこにいらっしゃるか、と思つてこれを書きました。どうも失礼の段、平に御容赦願います。五月廿七日』　結婚翌年で多忙を極め、宝物となるべき返信をもらうチャンス逃した。でもこの葉書と後年福井文化会館での講演会で重治全集に貰った著者署名は宝である。

ホー ホケキヨ

日本口笛奏者連盟という団体がある。この会の主催で一昨年伊勢原市で『東京国際口笛フェスティバル』が開催された。それに当たったのです、参加したのです。その前年は『口笛世界大会』が牛久市で開催され興味を持って聞きに行った。皆さん上手い。しかし所詮口笛、されど口笛である。挑戦できないことはないなど過信して件の大会にテープを送りその審査をパスして会に臨んだ。課題曲もオリジナルで提供され一人で練習した。自由曲に選んだ「会議は踊る」のテーマ曲は、まあまあ吹けるようになった。でも順番がきて舞台上上がったいざという段になりマークワークで失敗した。慣れてないのでまともに息をマイクが拾いメロディをマイクが上手く乗らず、多少の自惚れの鼻をへし折られてしまった。でも楽しい得がたい経験させてもらった。入賞した可愛い大庭少年は後日テレビの《題名の無い音楽会》などで活躍していて口笛音楽を宣伝してくれている。全くの道具いらずだから考えてみればこんな便利な楽器は無いだろう。誰でも試みれば簡単に上達するのだから。勿論高度の演奏法ウオーブリングなどというものもあり都内でも口笛教室も十ヶ所近くあると聞く。気軽な口笛も奥が深いのだ。口笛教室に入室する時の挨拶は《ホーホケキヨ》である

思い出ぼろぼろ

故郷金津の家から遠望する越の三山が好きである。古里の山は懐かし、有難きかなである。この富士写ヶ岳、火灯山、丈比岳をロータリー在籍時代に山歩きの得意な会員に誘われて夫婦で参加した。楽しい気持ちのいい仲間だった。メタボの私より家内の方が健脚で丈比べの二つ目の瘤ではリュックを道端にほつたらかして家内の後塵を拝しながら息絶え絶えに登った記憶が鮮明である。加賀の白山山頂山小屋での星降る夜、乗鞍日の出で寒くて震えたあの日、若狭の夜叉ヶ岳の頂上の神秘の湖でのシーンも忘れられない。あの時の友が懐かしい。あのときの家内は元気だったなあ。ただ近場の剣ヶ岳縦走で鎖場で滑り家内が腕骨折の事故も苦い思い出である。尾瀬沼湿原トレッキングの親しい仲間も何人か鬼籍に入ってしまった。自然に触れると人間は素直になれる。自然を畏れ、自然を慈しみ、自然を愉しむをコンセプトに環境NPO法人を立ち上げたが、そのベースとなった福井高須の里山、標高四百米の自然林、おおよそ二十五万平方の広大な雑木林では早春から鶯の鳴き声が絶えることが無い。十数年前に建てたログハウスに居ると日本海を遠望し仙人気分になれるのだが、眼を悪くしてくねくねの林道ドライブもままならず残念だが豊饒の海を育てる里山を持っていることで由としなければならぬのか。無念である。